



(奈良)

この調査は、県営住宅建設に伴うもので、調査地は、平城京の条坊復元では右京一条二坊一坪にあたる。調査区は、六m×七五mの南北トレンチと、それに直交

# 一九七七年以前出土の木簡(二九)

## 奈良・平城京跡右京一条二坊一坪

へいじょうきょう

- 1 所在地 奈良市二条町
- 2 調査期間 一九七二年(昭47)十一月～十二月
- 3 発掘機関 奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部
- 4 調査担当者 代表 坪井清足
- 5 遺跡の種類 都城跡

- 6 遺跡の年代 古代
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

する六m×二五mの東西トレンチからなり、調査面積は約六〇〇㎡である。

検出した遺構は、奈良時代以前、奈良時代、及び奈良時代以後の三期に大別される。ただ、奈良時代以前及び以後の遺構は、遺構の重複関係によるもので、いずれも時期を決める遺物は出土していない。

奈良時代の主な遺構は、東西棟建物の西妻部分、溝三条、土坑三基、井戸一基で、木簡は、南北・東西のトレンチが交差する付近で検出した井戸SE八一〇の下層から一点出土した。

井戸SE八一〇は、一辺約四m深さ二mの方形の掘形をもち、井戸枠は残存しない。井戸の堆積土は大きく上下二層に分かれ、上層からは平安時代の黒色土器、須恵器甕などが出土し、下層からは、奈良時代末頃の土器、宝亀・延暦年間



墨書土器集合

(七七〇〜八〇六)頃の軒平瓦、緑釉の火舎の脚部などのほか、「□  
継」(須恵器杯または皿底外)、「下」(須恵器杯AⅡ底外)、「赤」(土師器  
皿AⅠ底外)と記された墨書土器が出土した。上層の遺物から、井  
戸は、平城京廃絶後しばらくして埋没したものと推測される。

## 8 木簡の积文・内容

(1) 「○□水船四枚切机四前中取一前 174×20×3 011

上端・右辺は削り、下端は二次的切断、左辺は二次的削りか。船  
は槽に通じることから(『和名抄』)、「水船」は水槽のことであろう。  
「切机」は俎、「中取」は中取机(案)のことで、脚のついた机で  
ある。厨房用具・食膳具の類の品名と数量が列挙された木簡である  
が、用途は不詳。

## 9 関係文献

奈良文化財研究所『平城宮発掘調査出土木簡概報』三八(二〇〇  
七年)

(山本 崇)

